

# カウンセリング理論の哲学的基礎付け

## —その必要性に関するアメリカにおける議論を中心に—

岩本親憲

はじめに

本稿の目的は、カウンセリング実践を支える理論的前提、特に哲学的前提を明らかにすることである。今日、カウンセリングに関する研究の多くは、技法としてのカウンセリングの効果を実証するものである。カウンセリングが今日まで発展してきたのは、そのような効果を実証する心理学的な調査研究によるところが大きい。しかしながら、こうした実証研究の発展によって、〈良い効果をもたらすことのできる技法〉としてのカウンセリングが強調されすぎた観がある。現に、このような技術主義のカウンセリングに警鐘を鳴らし、カウンセリングを広く社会との関係から捉えなおすことを求める動きも見られる<sup>1</sup>。また、スクール・カウンセラーの公立学校への導入に伴って、様々な問題が指摘される。例えば、スクール・カウンセラーに教員免許や教職経験が必要であるか否か、といった問題である<sup>2</sup>。

このような技術主義に対する批判は、カウンセリングを専門にしていなくても人々だけでなく、それを専門とする研究者の間でもなされている。日本において、技術主義に対する批判がなされる要因として、次の3点が考えられる。1) カウンセリングと心理療法が理論的に混同されやすいこと。2) カウンセリングの哲学に関する研究が蓄積されてきていないこと。3) カウンセリングの行なわれる主要な場が、価値や文化と密接に関わらざるを得ない施設であるのにもかかわらず、そのような価値や文化に関わる問題が十分に検討されてこなかったこと、である。

本稿は、特定のカウンセリング理論の体系を解説するものではなく、また特定のカウンセリング理論を批判的に検討しようとするものでもない。本稿は、カウンセリングを心理学的技術としてのみならず教育的援助の過程として、つまりひとつの教育機能として捉え、技法としてのカウンセリング理論ではなく、カウンセリング実践を支えている哲学的枠組みとしてのカウンセ

リング理論を考察の対象とするものである。それによって、カウンセリングがどのような哲学を基礎として成立するものであるのかを明らかにすることを課題とする。

そこで、まず1. においてカウンセリングと心理療法を理論的に区別し、そして2. においてカウンセリング理論とは何かを明らかにした後、3. においてカウンセリング理論の哲学的基礎について考察していく。「カウンセリングとは何か」、またカウンセリングの哲学を明らかにするための手がかりとして、カウンセリングの諸理論を2つの立場、すなわち「環境主義」(environmentalism)と「人間主義」(humanism)に類別し、カウンセリング理論の基礎となる哲学を明らかにしたジェームズ・パークレイ (James R. Barclay) の『カウンセリング方略の基礎』(*Foundations of Counseling Strategies*, 1971)<sup>3</sup>に本稿は注目する。最後に、今後の課題として、カウンセリング理論の哲学的基礎に関する研究の重要性について述べた後、カウンセリングの哲学的基礎を探るうえで、ジョン・デューイ (John Dewey) の「インタラクシオン」(interaction) 概念が有効であることを示唆する。

### 1. 治療モデルと教育モデル

カウンセリングは、治療(セラピー)としての機能を含み得るが、それは一種の教育過程であり、教授機能のひとつであると解釈することができる。さらに、カウンセリングは目的志向的な過程であり、その過程において、諸個人に応じた学習を生じさせるような教育機能を果たすものである、と考えることができる。

このような見方から、本稿は心理療法とカウンセリングを理論的に明確に区別し、カウンセリング理論を考察の対象とする。なぜならば、カウンセリングと心理療法は、それぞれが拠って立つ理論モデルにおいて大きく異なっているからである。カウンセリングは教育モデルを、心理療法は治療モデルをその基礎として

おり、それぞれの目的は大きく異なっていると考えられる。したがって、カウンセリングの哲学的基礎を分析する際には、心理療法とカウンセリングを理論的に区別する必要があるのである。

確かに、カウンセリングと心理療法の機能に焦点を当てたときには、それらを等しく捉えたり、それらが重複するものであると捉えたりすることができるかもしれないが、それらの目的と思想を論ずる際には大きな相違点が浮かび上がってくるので、理論的には両者をはっきりと区別することが重要なのである。心理療法の目的は、「治療」という概念によって比較的明確に論ずることができる問題であるのに対して、カウンセリングの目的についての議論は、教育目的論と同様に、非常に困難な問題をはらんでいる。つまり、カウンセリングを成立させている思想は、心理療法におけるそれとは次のように異なっているのである。すなわち、カウンセリングは、たとえどのような理論的立場であっても、カウンセラー（クライアント）を何らかの所与の目的に対して当てはめることを望まない。なぜならば、カウンセリングとは本来的にカウンセラーとカウンセラーのインタラクション（相互作用）によって成り立つものだからである。それに対して、たとえクライアントとのカウンセリング（あるいはクライアントからセラピストへの一方向的な相談）によって治療目標が設定されたとしても、心理療法においては常に、社会的に付与された規準であり標準である〈正常〉（normal）という概念によって目的が大きく規定されるからである。

ここでの問題は、カウンセリングと心理療法との相違が、単にどちらがカウンセラー（クライアント）に対してどれだけ民主的でどれだけ方法として有効か、という相対的な比較ではない。むしろここで問い直されなければならないのは、両者に期待される社会的役割と目的が異なっているにもかかわらず、両者を同一の価値規準によって捉えようとすることである。カウンセリングは、カウンセラーの抱える「問題」をそのまま肯定したり否定したりするものではなく、社会的な存在であると同時に実存的な存在であるカウンセラーが介入することによって、そのカウンセラーの「問題」（もしくはその問題を感じるカウンセラーの「感情」）が、社会的な文脈において再構築される〈プロセス〉である。したがって、カウンセリング過程においては、あらゆる社会的価値や文化と、個人的価値や個人的文化がぶつかり合うのである。その過程におけるカウンセラーとカウンセラーの関係の質を、教育とい

う枠組みで捉えることには大きな意義がある。まさにこの点において、カウンセリング概念には、カウンセラー個人の哲学が反映するのである。

そこで、カウンセリング実践における2つの機能的側面、つまり心理療法としての側面とカウンセリングとしての側面の問題については今後の課題とし、以上のような視点から、カウンセリング理論について以下に見ていくこととする。

## 2. カウンセリング理論

特定のカウンセリング理論の体系を研究したもの、あるいは様々なカウンセリング技法の特徴を類型化して整理したものは多く見つけることができるが、カウンセリングにおける〈理論〉について詳細に考察した研究は驚くほど少ない。シュテッフレとバークス（Steffle & Burks, 1979）<sup>4</sup>を手がかりに、以下にカウンセリングにおける理論の問題について考察していく。

### (1) 多様なカウンセリング理論の存在

スティーブン・ペッパー（Stephen, C. Pepper）は、「実証主義者にとっての理論（hypothesis）<sup>5</sup>とは、データを秩序立たせて保持するための人間の慣習（convention）であり、それは経験的事実に還元できるような価値を本質的にもたないものである」<sup>6</sup>と述べている。この意味で、カウンセリングにおける理論とは、カウンセリングに関するデータを秩序立たせて保持するための理論家の慣習である、ということができる。

シュテッフレとバークスは、このペッパーの規定をはじめ、いくつかの「理論」の定義を確認した後に以下のように述べている。

これらの定義に共通しているものとは、現実（reality）、信念（belief）という2つの要素である。現実とは、私たちが観察し、説明しようと努力するようなデータや行動である。信念とは、私たちが観察するものを、それについての考える限りの説明に関係付けることによって、データから意味を見いだそうとする方法である。したがって、理論の構築とは、人生を了解する我々の必要に起因するものなのである。<sup>7</sup>

さらにシュテッフレとバークスは、「理論なしでも完全にやっていると感じている人、そして反理論的立場（antitheoretical position）の人でさえ、たいていは、漠然と規定されたまさに暗黙の理論に基づいて行

動しているのである。そうでなければ、何をすべきかを決定することはできない」<sup>8</sup>、とカウンセリングにおける理論の重要性を強調している。

シュテッフレとパークスにしたがえば、カウンセリング理論は、その理論家が現実をどのように捉えるのか、またどのような信念を持っているのかという2つの要素によって成り立っている、と考えることができる。このようにカウンセリング理論を捉えると、異なった哲学的前提を基礎とする多様なカウンセリング理論が存在することが容易に理解される。

カウンセリングの理論は、自然科学における理論とは異なっている。自然科学のモデルによって、人間の行動の変容過程を客観的に記述することは可能であるが、変容過程そのものを普遍的に理論化することは困難である。カウンセリング過程における変容は、カウンセラーとカウンセリーという〈人間〉を媒介として起こるため、客観的な技術論としてのみカウンセリングを理論化することはできないのである。

また、「すべてのカウンセリング理論が仮定しているのは、変容 (change) が可能である、ということである」<sup>9</sup>とジョン・リー (D. John Lee) が述べるように、カウンセリング理論には、変容が可能であるという共通した理論的前提が存在する。この前提においては、どの理論もまったく違いがないといえる。しかしながら、最も大きな相違は、この変容がどのようにして起こるのか、という点である。一般に、カウンセリングが学習過程であることには同意が得られるが、その学習がいかんして引き起こされ、どのような方向に導かれるべきかについては、それぞれの理論によって異なっている<sup>10</sup>。

カウンセリング理論がそれぞれの理論家によってしばしば異なっているのは、以上のような特質によるものと考えられる。カウンセリング理論には、普遍的で客観的に記述される側面ばかりでなく、価値と主観を含み込んだ仮説としての側面もまたある。ジョセフ・ショーベン (Joseph Shoben) は、カウンセリングにおける理論に関して、「目的の理論 (ends theories)」と「手段の理論 (means theories)」とを区別することが重要であると主張した<sup>11</sup>。目的の理論とは、哲学あるいは価値についての理論であり、カウンセリングの目的に関係する。手段の理論とは、哲学的というよりも科学的なものであり、カウンセリングの目的がどのようにして達成されるのかについての技術に関係する理論である。ギルバート・レン (Charles Gilbert Wrenn) もまた、カウンセリングにおけるこの2つの側面を、

それぞれ哲学と心理学 (および社会学) に対応させて、この2つを混同させることなく発展させていく必要があることを主張した<sup>12</sup>。

以上に見てきたように、それぞれのカウンセリング理論にはその理論の構築者の文化・価値・人間観などが必然的に含まれるので、カウンセリング理論は普遍的で価値中立的な自然科学モデルの理論とは異なっている。たとえ客観性・科学性を重視する行動主義者であっても、そこで目指される人間像なしにはカウンセリング過程を理論化することはできない。カウンセリングの目標、目的をもたないカウンセリング理論は存在しない。したがって、カウンセリング理論には、なんらかの哲学的前提が存在しているとみなすことができるのである。そして、そのような哲学的前提には様々なものが存在し、それぞれの哲学的前提によって異なるカウンセリング理論が構築されるのである<sup>13</sup>。

それでは、カウンセリング理論の前提となるものには一体どのようなものが存在するのであろうか。次に、カウンセリング理論の前提となる4つの基礎について見ていくことにする。

## (2) カウンセリング理論の4つの基礎

シュテッフレとパークスは、カウンセリング理論の基礎として以下の4つを挙げている。すなわち、1) 個人的基礎、2) 歴史的基礎、3) 社会的基礎、4) 哲学的基礎、である。

まず、個人的基礎とは、理論の構築者あるいは使用者の「個人的ニード構造」(personal need structure)<sup>14</sup>である。シュテッフレとパークスは、この点に関する最も良い説明として、次のショーベンの陳述を引用している。

カウンセリングの分野において、別のものよりその理論が優れているといえる証拠を得られる調査的方法はあまり存在しないので、私たちは所与の理論を使うことを決定したカウンセラーの中に、なぜその人がその理論に惹かれるのかを見つけ出さなければならぬ。<sup>15</sup>

次に、シュテッフレとパークスによると、歴史的基礎とはカウンセリング理論が構築される際の、社会の歴史的影響のことである。「社会科学の理論は、空間 (space) と時間 (time) に結び付けられていると結論付けなければならない。つまり1850年代の行動を説明した諸理論は、2000年における行動を説明しないかも

しれないし、アメリカにおいて合理的に思われる理論は中東においては有用ではないかもしれないのである。』<sup>16</sup>

さらに、社会的基礎とは、シュテッフレとパークスによれば、そのカウンセリング理論が構築される環境における文化的影響のことである。特に、異文化間でのカウンセリングにおいては、この点に十分に配慮しなければならぬと考えられる。ここでいう「異文化間」とは、必ずしも国家間のことを意味するものではない。当然同じ地域社会においても、異文化は存在する。異文化を「異文化」として明確化することが、カウンセリング過程における重要な基礎のひとつであると考えられる。

最後に、シュテッフレとパークスによれば、哲学的基礎とは、理論構築者や理論の保持者が拠り所とする哲学的立場、あるいは哲学的仮説である。言い換えれば、人間をどのように捉えるのか、現実とは何か、何が価値があるのか、人間は対象をどのように認識するのか、といった〈思想〉が哲学的基礎である、と考えることができる。シュテッフレとパークスが、「哲学と実践との間には論理的な関係がありそうだが、特定の哲学的立場が必然的に特定のカウンセリング理論を導き出すかどうかは疑問である。』<sup>17</sup>と述べているように、この哲学的基礎が必ずしもカウンセリングの実践に直接的な作用を及ぼすものではないが、少なくとも4つの基礎の中では最も重要なものであると考えられる。

シュテッフレとパークスは、カウンセリング理論には以上に見てきたような4つの基礎が存在すると考えている。もちろんそれらの4つの基礎は互いに完全に独立したものではない。これらには、互いに重なり合う部分が存在しているはずである。例えば、個人的基礎や哲学的基礎は、文化的基礎と社会的基礎の制約を受けるものであろうことは十分に予想できる。このように、これらの4つの基礎は互いに深く関係しあうものではあるが、カウンセリング実践を理論化するうえで最も重要な基礎としては、哲学的基礎が挙げられる。なぜなら、先に挙げたカウンセリング理論の2つの側面、つまり「目的の理論」と「手段の理論」のうちの前者に対して、もっとも大きな影響を及ぼすものであると考えられるからである。つまり、哲学的基礎はカウンセリングの目的に最もかかわりの深い重要なものであると考えられる。

### (3) 最も良いカウンセリング理論とは

先に挙げた4つの基礎によって成立しているカウンセリングの諸理論の中で、最も良い理論とはどのよう

なものであろうか。手段の理論としての側面からカウンセリング理論を見た場合には、効果や効率を判断基準として、最も良いカウンセリング理論を示すことができるかもしれない。つまり、どのようなカウンセリング過程においても有用なもの、言い換えれば普遍的な理論ほど最も良いカウンセリング理論と考えることができる。とはいえ、手段の理論だけでなく目的の理論としての側面も考え合わせると、どの理論が最も良い理論であるのかを判断することは、それほど容易な問題ではないであろう。なぜならば、手段としてのカウンセリング理論の側面においては、普遍的な法則を理論化することは比較的可能なことではあるが、目的の理論を普遍化することには様々な問題が絡んでくるからである。

また上述の問題に加えて、例えば「効果」という規準によってカウンセリング理論の良さを判断するとしても、そのカウンセリングの効果はどのようにして測られるのかによって、見解が大きく分かれるという問題もある。つまり、カウンセリング過程においてカウンセラーの行動がどれくらい、あるいはどのように変容したのかを測定するのか、またはカウンセリング過程によって変容した認知レベルに焦点を置くのかによって、「効果」という規準によって測られるものが異なってくる。リーは、あるカウンセリング理論を評価し、正当化する規準はその他のすべてのカウンセリング理論を評価する公正な規準とはなりえないことを指摘している<sup>18</sup>。リーによれば、このようなジレンマは「解釈学的循環」(circle of hermeneutics)といわれるものであるとされる。このジレンマに対する対応としては、以下の2つが考えられるとリーは述べている。すなわち、1) 特定の立場から、他の理論を読みかえる。2) 折衷主義(相対的プラグマティズム)の立場をとる、といった方法である。いずれにせよ、カウンセリング理論において最も良いもの、あるいは悪いもの、を判断する普遍的な規準は存在しないといえる。

様々なカウンセリング理論が存在する中で、どの理論が最も優れた理論であるかを客観的に定めることができないのは、以上に述べてきたとおりである。しかしながら、理論のレベルを超え、実践場面におけるカウンセラーの行為レベルにおいてどの理論が最も有効であるのかを考察することは可能であろう。

ある特定のカウンセリング過程が高く評価されるか否かは、その過程において用いられたカウンセリング理論の評価には依存しないと考えられるだろう。フィードラー(Fiedler, F. E.)による有名な研究<sup>19</sup>は、こ

のことを実証するものの一つである。それでは、もしも「最も良いカウンセリング過程」を支えるものがカウンセリング理論の質ではなく、カウンセラーの経験であるとするのならば、カウンセリング理論の「良さ」を評価する規準とは何であろうか。シュテッフレとパークスは、良い理論とは以下の5つの形式的な属性(formal attributes)をもつものであると述べている<sup>20</sup>。

- 1) 良い理論は明瞭である。
- 2) 良い理論は包括的である。それは領域を持ち、多くの行動を説明する。
- 3) 良い理論は明示的である。つまり精密である。
- 4) 良い理論は厳選されていて、現象を過度に説明しない。
- 5) 良い理論は有効な調査を生み出すものである。

これらの規準は、良いカウンセリング理論を知るための手がかりとしては有効である。とはいえ、先に見た4つの基礎の性質を考慮すると、どのカウンセリング理論が普遍的に良い理論であるかを決定することは困難であることが理解できるであろう。なぜなら、「普遍的に良い文化」とは何かを判断できないのにもかかわらず、「普遍的に良いカウンセリング理論」を決定することは不可能だからである。さらにいえば、「普遍的に良い哲学」とは何かを決定することが正当化できなければ、「普遍的に良いカウンセリング理論」を正当化することは不可能なのである。

カウンセリング実践の基礎となる哲学とは何かを明らかにすることができるのならば、カウンセリング理論の評価もある程度は可能になるであろう。しかしながら、そのようなカウンセリング実践の基礎となる哲学を見つけ出すことができるであろうか。この課題はあまりにも困難なものである。そこで、この問題は今後の課題とし、まずカウンセリング理論の基礎となる哲学を検討していくことが必要であろう。以下では、カウンセリング理論の基礎となる哲学について見ていくこととする。

### 3. カウンセリング理論の哲学的基礎

カウンセリングは、20世紀初頭のアメリカにおけるガイダンス運動を歴史的起源として、精神衛生運動、心理測定運動、心理療法などから影響を受けながら、今日まで発展してきている<sup>21</sup>。ガイダンス運動から数えて約100年の歴史において、カウンセリングが最も理論的に、また技術的に発展したのは、1950年代から60年

代にかけてである<sup>22</sup>。その際、カウンセリングが哲学的に基礎付けられる必要性を早くから主張していたのが、ギルバート・レン(Charles Gilbert Wrenn, 1902-2001)である<sup>23</sup>。

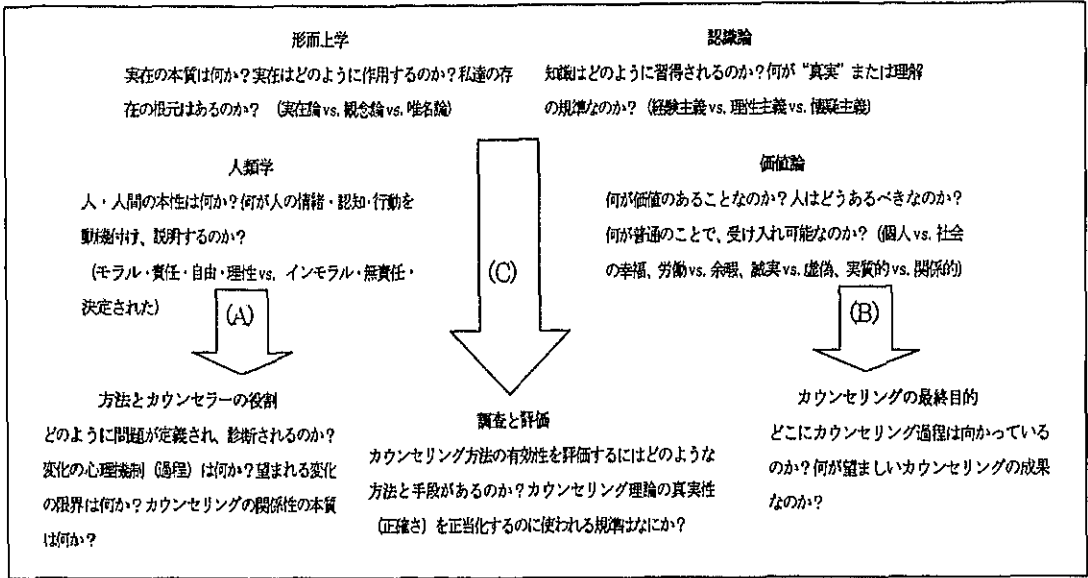
#### (1) レンによって提唱された緊急の課題

レンは、カウンセリングを哲学的・心理学的に基礎付ける必要があることを、誰よりも強く主張した<sup>24</sup>。レンは、あくまでも彼自身の見解であるとしながら、カウンセリングの哲学としては実存主義が最も適切であるだろう、と考えた。しかし、レンは、ある特定の哲学的立場からはじめてカウンセリングの基礎付けを行なおうとしたのではなく、いくつかの哲学的立場と心理学的立場を挙げながら、彼自身の見解を主張したのであった。それはまさに、カウンセリングが普遍的な統一的哲学的立場によって基礎付けられるものではなく、最終的には、理論家本人の認識枠組みによって大きな制約を受けうることを示唆するものであった。

レンのように個人的立場を明確に示す者は少なく、お互いの間の哲学的前提の相違を明確にしないまま、カウンセリングの理論家たちはしばしば不毛な論争を繰り返してきた。ここで何よりも明確にされなければならないのは、それぞれのカウンセリング理論が前提としている人間観と社会観である。その人間観の相違を典型的な二項対立の図式で示せば、人間の性善説 vs. 性悪説、行動主義 vs. 人間主義である。これらのカウンセリングの哲学的基礎に関しては、明確な立場を打ち出す人々がいる一方、それを折衷しようとする人々もいた。1960年代におけるカウンセリング技法の爆発的な増加によって、カウンセリングの統一的な理論を打ち出すことが困難であった1970年代には、カウンセリングは折衷主義によってそれらの混乱を收拾するしかなかった<sup>25</sup>。その一方で、多様化するカウンセリング諸理論を分析し統合するために、カウンセリングの哲学を客観的に分析しようとしたいくつかの研究がある<sup>26</sup>。それらのなかでも最も体系的なものが、ジェームズ・パークレイ (James R. Barclay) の『カウンセリング方略の諸基礎』(*Foundations of Counseling Strategies*, 1971)である。また、カウンセリング理論と哲学の関係について考察したジョン・リーの研究<sup>27</sup>も重要である。そこでこれらの研究を用いながら、カウンセリング理論と哲学の関係について、またカウンセリング理論の哲学的基礎について以下に考察していく。

図1：哲学とカウンセリング理論

(Lee (1983) より作成)



(2) カウンセリング理論と哲学の関係

カウンセリング理論には様々なものが存在する。それらの既存の理論は、各々のカウンセラーが実践に向かう際の枠組みとして役立つだけでなく、それぞれのカウンセラーが自らの理論を構築していく際の基礎となるものである。ジョン・リーは、自らのカウンセリング理論を系統立てていく際に、所与のカウンセリング理論をメタ理論的に分析することが有効であると主張している<sup>28</sup>。

リーは、カウンセリングに最も関係の深い基礎的な領域として、哲学を4つの分野に分けている。すなわち、1) 形而上学(Metaphysics), 2) 人間学(Anthropology), 3) 認識論(Epistemology), 4) 価値論(Axiology), である<sup>29</sup>。リーは、これらの4つの領域はあくまでも教示用(pedagogical purposes)のための分類であるとしている。なぜならば、これらの4領域は明確に区別することができないほど、互いに密接に関連しているからである。以上のような哲学分野の分類に加えて、リーは、カウンセリング理論を論述する際に区別されるべき側面として、以下の3つを挙げている。すなわち、1) カウンセリング過程とカウンセラーの役割、2) 調査研究と評価、3) カウンセリングの最終目的(goals), である。ひとつの理論においては、これらの3つの要素は絡み合いながら一つの概念的構造をなしており、この区分はあくまでも理論上のものであるとされる。

リーは、上述の、4つの哲学領域と3つのカウンセリング理論の領域について、それぞれの中身を質問形式の命題によって明らかにし、それらの関係を図1のように表している。(A)の矢印は、カウンセリング理論における変容過程とカウンセラーの役割が、人間学的仮説に基づいていることを示している。「人間の行動や経験に影響する人間の条件(condition)に関する仮説なしに、カウンセラーはクライアントの行動や経験を変容させることはできない」<sup>30</sup>のである。(B)の矢印は、価値論とカウンセリングの目的の関係を表している。すなわち、カウンセリング過程における「問題を同定する枠組みと、変容の目標や方向付けの枠組みを評価することによって、そのカウンセリング理論の価値論的立場を決定することができる」<sup>31</sup>のである。(C)の矢印は、特定のカウンセリング理論の調査や評価は、その理論が由来している形而上学的信念と認識論的信念に基づいてなされなければならないことを示している。リーは、「ある観念論を別の認識論によって評価すること(例えば、経験主義的方法論によって、観念論的方法論を評価すること)を止めよう」<sup>32</sup>と主張している。

前節においても述べたように、このようなカウンセリング理論と哲学的信念の関係において、どのカウンセリング理論が最良かを決定することは不可能である、とリーは主張する。異なった認識論的信念を基礎とする2つの理論を、どちらか一方の評価規準によって評価することはできないのである。

## (3) カウンセリング理論における認識論と存在論

ジェームズ・パークレイは、「人間の行動変容に効果を及ぼす過程としてのカウンセリングは、認識論的仮定(postulate)と存在論的仮定に論理的な関係がある」<sup>33</sup>としている。このことは、「知識と知の階層」(hierarchy of knowledge and knowing)<sup>34</sup>についての特定の基本的仮説が、特定のカウンセリング理論における目標、方法、価値規準に影響を及ぼしていることを意味している。

カウンセリングにおいてはなんらかの種類の知識がコミュニケーションされている、ということには一般的な同意が得られるとして、パークレイは、知識に関するどんな理論にも共通する要素として次の3点を挙げている。すなわち、1) 知る人、つまり主体、2) 知る対象となるもの、つまり客体、3) 知るための行為、つまりそのプロセス、である。さらに、どのような認識論の体系においても、主観(subject)と客観(object)という要素が見いだせるとパークレイは主張する。知ることのプロセスの見解によって、これらのどちらかが重視されることになるという。

パークレイは、このような認識論的、存在論的強調における対立を、実存(existence)一本質(essence)という軸と、主観(内的現実)一客観(外的現実)という軸の2つを用いることで、さまざまなカウンセリング理論をその立場によって分類している。

## (4) カウンセリング理論の哲学的類型

ジェームズ・パークレイは、カウンセリング理論と実践を補強するような認識枠組み(特に認識論や知識に関する確実性のレベルに関係するもの)として、カウンセリング理論におけるアプローチを以下のように4つに類型化した。1) 客観志向的アプローチ、2) 主観志向的アプローチ、3) 客観操作的アプローチ、4) 主観操作的アプローチ、である。これらの4つのアプローチを代表する具体例は、それぞれ1) 現実主義的問題解決アプローチ、2) 新フロイト派アプローチ、3) 行動主義的アプローチ、4) クライアント中心のアプローチであるとされる。

それぞれについて、パークレイは次のような見解を示している<sup>35</sup>。1) 現実主義的問題解決アプローチの特徴は、合理的な説得や確信させること、またそのような方法を訓練することにある。2) 新フロイト派アプローチの特徴は、クライアントの問題をかれが存在する貧弱な環境によるものである、とみなすところにある。3) 行動主義的アプローチの特徴は、クライエン

トの問題は不適応行動のパターンを学習した結果である、とみなすところにある。4) クライアント中心のアプローチの特徴は、クライアントの問題はかれの弱い自己概念に起因するものであると捉えることであり、個人としてクライアントを見るところにある、とされる。

1) 客観志向的アプローチと3) 客観操作的アプローチは、広義の意味で捉えると「行動主義」(behaviorism)であり、客観的事実を志向するアプローチである。一方、2) 主観志向的アプローチと4) 主観操作的アプローチは、「生活世界」(Lebenswelt)を強調する現象学の立場やカール・ロジャーズ(Carl R. Rogers)に代表されるヒューマニズムの立場、また実存主義的立場や現存在分析の立場を含むものであるとされる。

パークレイは、上述の1)と3)のアプローチと、2)と4)のアプローチの二つをそれぞれ、「環境主義」(environmentalism)と「人間主義」(humanism)の二つの哲学的立場に対応させて、それらの立場における相違を表1のようにまとめている。パークレイによれば、「環境主義」の強調点は、知識の対象(客体)にある。知識の対象とは社会的なものであり、環境主義者は、自己理解よりも、環境と個人の間での一致(correspondent)を志向するのである。環境主義者は自然科学的方法論をその規範とし、実験心理学、スキナーの見解、デューイの実験主義アプローチ、初期の論理実証主義、フロイトと精神分析学派の思想によるリアリズム、といったものに影響を受けている。それに対して、「人間主義」はプロセスにおける主観的性質を強調する立場であるとされる。この立場の理論家は、カウンセリング過程の効果は、本質的に、クライアントの洞察と自己報告によって示されるべきものである、と考えているのである。パークレイはこの立場の具体例として、実存主義、現存在分析、自己概念理論、現象学を挙げている<sup>36</sup>。

以上に見てきたように、パークレイは、外的現実 vs. 内的現実、演繹的な本質志向 vs. 帰納的な実存志向、という2つの対立を軸とした図式を用いて、カウンセリング理論における環境主義的立場と人間主義的立場が、1) カウンセリングの目標、2) カウンセリングの方法、3) カウンセリングの評価規準、の3点において対立するものであることを明らかにした。パークレイによるこのカウンセリング理論の類型は、カウンセリングを哲学的に基礎付けていくうえで大きな意義もっているものである。

表1：環境主義と人間主義の違い

[Barclay (1971, p.28) より作成]

項 目	環 境 主 義 (Environmentalism)	人 間 主 義 (Humanism)
一般的志向	<ul style="list-style-type: none"> <li>・客観志向</li> <li>・文化規範と科学的現実</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主観志向</li> <li>・個人理解と主観的現実</li> </ul>
カウンセリングの目標	同一化と諸問題の明確化	主観的自己概念と理解の明確化
カウンセリングの方法	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 環境と科学的知識の探求を通じた理解</li> <li>2. 行動的欠損の同一化</li> <li>3. オペラント条件付けや、社会的学習理論を通じた行動の変容</li> <li>4. 脱感作と新しい学習を通じた不適応行動の除去</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 環境と自己との関係の理解</li> <li>2. 外的・内的環境の両方を探求する支持的対話</li> <li>3. 洞察と明確化を通じた自己理解の変容</li> </ol>
プロセスの オリエンテーション	<p>行動の変容は態度を変容させる。態度、意見 (feeling)、モチベーションなどは、思考の再構成を強いる行動と行動の変容に伴うものである。</p>	<p>態度と意見の変容、自己表現に対するブロックと防衛的学習の除去は、アイデアの自由な表現と行動における変容をもたらす。</p>
規準となる次元	<p>本質的に、外的・人口的・文化的評価基準に準拠する。テスト情報と統計学的推定と科学的調査デザインの利用</p>	<p>本質的に、クライアントの自己報告と／あるいは、カウンセラーの評価に依存する。カウンセラーの評価は、測定理論と統計分析にある程度依存するものである。</p>

今後の課題

本稿の目的は、カウンセリングにおける技術主義に対する批判に応え、カウンセリングの哲学的基礎付けの必要性を明らかにすることであった。日本におけるカウンセリング理論の技術主義的傾倒は、アメリカにおける約50年前の状況と重なるところがある。パークレイは、アメリカにおいてカウンセリングの哲学的基礎に関する研究が遅れた理由として、次の5点を挙げている<sup>37)</sup>。1) カウンセリングが、ガイダンスを補助する技術として位置付けられ発展したこと。それに加えて、2) ガイダンス自体が無定形な概念であったこと。また、3) アメリカにおけるカウンセリング理論へのアプローチには、アメリカの心理学において一般的なロック派の伝統がうかがえること。そして、4) 精神分析理論の発達、人間の本質についての演繹的観念への信頼、臨床的「技術」、といったものが、本質的に、アメリカ教育思想の趨勢と相容れないものであったこと。最後に、5) ヨーロッパ式の学問に対する馴染みのなさ、新しい研究への没頭、哲学的訓練の欠乏、そしてカウンセラー教育者による哲学についてのあまりにも単純な言明、といったすべてが現実的な問題点を不明瞭にする傾向があったこと、である。

アメリカにおいて、カウンセリングは1950年代にガイダンスから区別される独自の学問領域としての地位を獲得した。しかしながら、その際にはカウンセリングの技術的側面に関する研究がもてはやされ、カウンセリング理論の哲学的基礎に関して、あるいは価値・倫理・宗教に関わる問題についての研究が軽視されたため、1960～70年代のアメリカにおけるカウンセリングは混沌とした状況となっていたのである。アメリカにおけるガイダンスとカウンセリングの歴史について詳しいロジャー・オーブレイ (Roger F. Aubrey) は、1970年代のガイダンスとカウンセリングが、手段と目的の混乱によって専門的アイデンティティーを失い、向かうべき方向を見失っていたことを明らかにしている<sup>38)</sup>。日本におけるガイダンスとカウンセリングが、アメリカにおけるこのような歴史を繰り返さないためにも、1960～70年代アメリカにおいて議論された哲学的基礎付けに関する諸問題を検討することが今後の重要な課題として挙げられる。

さらに本論においては触れられなかったが、パークレイ (1971) が指摘した次のような論点も今後の課題として挙げられるであろう。すなわち、デューイのインタラクション概念が、カウンセリングとどのような



関係にあるか、という問題である。パークレイは、「直接的であれ間接的であれ、デューイは、教育に対する問題解決アプローチに理論的根拠を提供し、教育を社会適応 (social accommodation) の過程として考えた。環境とのインタラクションを通じた自己理解の改善 (improvement)、という観念は、たいていのカウンセリングのアプローチにおける本質的な仮説 (substantive postulate) である」<sup>39</sup>と述べている。さらにパークレイは、このようなデューイの「インタラクション理論」 (interaction theory) からの影響の痕跡が、著名な3人の研究者の業績に見られると述べている<sup>40</sup>。すなわち、ウィリアムソン (Edmund G. Williamson)、ロジャーズ、クルンボルツ (Krumboltz) である。これらの中でも、特にウィリアムソンの研究においてその影響が顕著であるとされる。

デューイのインタラクション理論とカウンセリング理論の関係を考察することで、カウンセリング理論における哲学的基礎を明らかにし、カウンセリングの目的や価値に関する問題を取り上げていく必要がある。それを解明することは、今後の課題としたい。

【註】

- 1 日本社会臨床学会編 (2000) 『カウンセリング・幻想と現実 (上巻 理論と社会)』, 現代書館。
- 2 例えば藤田 (1990) に拠れば、アーカンソー州、ミネソタ州、オハイオ州のハイスクールカウンセラーの資格要件では、教職経験のみならず教職外経験も必須であるとされる。藤田 (1990) はアメリカ合衆国におけるハイスクールカウンセラー制度を検討し、今後のカウンセラー制度の課題の一つとして、一般教員とカウンセラーの関係性を明確に整理しなければならないことを指摘している。  
藤田 晃之 アメリカ合衆国におけるハイスクールカウンセラー制度の現状と課題 — 「キャリア開発教育」の視点から— 教育学研究集録, 筑波大学大学院博士課程教育学研究科 筑波大学大学院博士課程教育学研究科 14号, 1990, pp.37-48.
- 3 Barclay, James R. *Foundations of Counseling Strategies*, New York: Wiley, 1971.
- 4 Stefflre, B. & Burks, H. M. *Function of Theory in Counseling*. In Herbert M. Burks, Jr. & Buford Stefflre (Ed.), *Theories of Counseling* (3<sup>rd</sup> ed.), McGraw-Hill Book Company, 1979.
- 5 それぞれの理論家が構築するカウンセリング理論は、経験によって修正され、変化する可能性のある〈仮

- 説〉によって構成されるものである、と考えることができる。このような意味で、理論を “theory” ではなく “hypothesis” と捉えることも必要であろう。
- 6 Pepper, Stephen C. *World Hypothesis: A Study in Evidence*, Berkeley, Calif.: University of California Press, 1970, p.71
  - 7 Stefflre, B. & Burks, H. M., op. cit., p.2.
  - 8 ibid., p.2.
  - 9 Lee, D. John. *Philosophical and Counseling: Metatheoretical Analysis, Personnel and Guidance Journal*, 1983, 62, pp.523-526.
  - 10 Stefflre, B. & Burks, H. M., op. cit., p.13.
  - 11 Shoben, E. J. Jr. 1953 *New Frontiers in Theory. The personnel and Guidance Journal*, 32, pp.80-83.
  - 12 Wrenn, C. G. 1959 *Philosophical and Psychological Bases of Personnel Services in Education. N. S.S.E. Yearbook*, 58, Part II, pp.41-81.
  - 13 坂本昇一による研究(『ガイダンスにおける哲学的前提に関する研究』, 1977, 風間書房)は、ガイダンス理論の哲学的前提を分析することによって、多様な理論的立場の存在を明確化した日本における先駆的なものである。
  - 14 Stefflre, B. & Burks, H. M., op. cit., p.3.
  - 15 Shoben, E. J., Jr. 1962 *The counselor's theory as a personal trait. Personnel and Guidance Journal*, 40, pp.617-621.
  - 16 Stefflre, B. & Burks, H. M., op. cit., p.4.
  - 17 Stefflre, B. & Burks, H. M., op. cit., p.6.
  - 18 Lee, D. John, op. cit., p.525.
  - 19 Fiedler, F. E. 1950 *A comparison of therapeutic relationships in psychoanalytic, nondirective and Adlerian therapy. Journal of consulting Psychology*, 14, pp.436-445.
  - 20 Stefflre, B. & Burks, H. M. op. cit., p.9.
  - 21 American Psychological Association, Division of Counseling Psychology, Committee on Definition. 1956 *Counseling psychology as a specialty. American Psychologist*, 11, pp.282-285.  
Whiteley, J. M. (Ed.) 1980 *The History of counseling Psychology*. Brooks/Cole Publishing Company.  
Whiteley, J. M. 1984 *Counseling Psychology: A Historic Perspective. Counseling Psychologist*, 12, pp.3-95.

- <sup>22</sup> Aubrey, R. F. 1977 Historical Development of Guidance and Counseling and Implications for the future. *The personnel and Guidance Journal*, 51, pp.288-295.
- <sup>23</sup> Wilkins, W. D., & Perlmutter, B. J. 1960 Chapter I: The Philosophical Foundations of Guidance and Personnel Work. *Review of Educational Research*, 30, pp.97-104.
- <sup>24</sup> Wrenn, C. G., op, cit., pp.41-81.
- <sup>25</sup> Aubrey, R. F. 1982 A House Divided: Guidance and Counseling in 20<sup>th</sup>-century America. *The personnel and Guidance Journal*, 61, pp.198-204.
- <sup>26</sup> カウンセリング理論と哲学理論の関係についての代表的な先行研究として、リー (1983) は Barclay (1968, 1971), Frey (1972), Rychlak (1973, 1981) を挙げている。
- <sup>27</sup> Lee, D. John., op, cit., pp.523-526.
- <sup>28</sup> *ibid.*, p.523.
- <sup>29</sup> *ibid.*, p.523.
- <sup>30</sup> *ibid.*, p.525.
- <sup>31</sup> *ibid.*, p.525.
- <sup>32</sup> *ibid.*, p.525.
- <sup>33</sup> Barclay, James R., op, cit., p.15.
- <sup>34</sup> *ibid.*, p.15
- <sup>35</sup> *ibid.*, pp.12-15.
- <sup>36</sup> *ibid.*, p.15.
- <sup>37</sup> *ibid.*, pp.18-19.
- <sup>38</sup> Aubrey, R. F. 1977, op, cit., pp.293-294.
- <sup>39</sup> Barclay, James R., op, cit., p.368.
- <sup>40</sup> *ibid.*, pp.371-377.

# Philosophical Foundation of Counseling Theory :

## Its Necessity in the Discussions in America

Chikanori Iwamoto

The purpose of this paper is to investigate philosophical foundation of counseling theory. Rather than criticize a theory of counseling or draw a rough map of counseling theories.

Due to technical development in 1960's America, there are lots of articles concerning effective counseling techniques. The technical aspect of counseling theory has excessively emphasized by these researches. However, it is also of importance to focus on another aspect of counseling theory, e.g., foundation of counseling theory. Steffire & Burks (1979) identified four major bases that involve the philosophical base underlying counseling theory. C. Gilbert Wrenn (1959), James R. Barclay (1971), and D. John Lee (1983) pointed out an existence of certain philosophical bases underlying counseling theory. Focusing on the works of Barclay (1971), it was revealed that there are two types of philosophical positions, Humanism and Environmentalism, in counseling theory.

Two issues to be tackled are remained so far. First, clarifying the philosophical foundation of counseling is needed to be detailed as a fundamental issue. Second, it is to be considered that the relation between Dewey's conception of "interaction" and counseling theory. They are significant issues to be investigated further.

The contents of this paper are as follows;

Introduction.

1 . Treatment model and Education model.

2 . Counseling theory.

- (1) Existence of various counseling theories.
- (2) Four bases underlying counseling theory.
- (3) How do we know what the best counseling theory is?

3 . Philosophical bases of counseling theory.

- (1) The pressing subject advocated by Wrenn, C. G.
- (2) Relation between philosophy and counseling theory.
- (3) Epistemology and ontology in counseling theory.
- (4) Philosophical types of counseling theory.

Conclusion